

YAMATOZA

大和座
通信
大通

日々新面目

其の二十

安東伸元

先日ある花道家の死を惜別する新聞記事を読んでいると、伊豆修善寺の「あさば旅館」の名があつて思わず懐かしさを憶えた。そのあさば旅館の由緒ある能舞台で、この女流花道家が「能と桜の花手前」の競演をした時（一九九一年三月）の事が記されていたのである。《薄明かりの中、白い着物に身を包み深紅の大輪の牡丹を手に現れた安達瞳子は、息をのむほどに艶やかだった。が、このときはすでに病とも闘っていた》今年三月一〇日に死去、六九歳と報じられていた。私は花道には全くと言っていいほど無縁の無頼漢であるが、この方の存在は数十年前から私の理念の中に確かな記憶として在り続けてきた。最初にこの方を知ったのは写真か映像かそれとも新聞雑誌の記事だったか定かには憶えていないが、その初見の印象が鮮

烈で衝撃的でさえあつた。一派を興した「花芸安達流」は椿の花と共に世間の認知を得たが、その椿の花の如き知性と情念を併せ秘めた、静謐の美しさと凛とした存在感が私を強烈に刺激し、かくも長く記憶を褪色させなかつたのである。この方とは多分同年か同学年で、あの太平洋戦争を小学生の年齢で体験したという共通意識が何処かに感じられたのかもしれない。さて、私が懐かしむあさば旅館であるが、此処とのご縁は丹波篠山の能楽資料館館長、故中西通さんとの出会いに端を発する。私と発足したばかりの「申楽/大和座」を篠山へ誘つたのは写真家の今駒清則さんであつた。当初の能楽資料館には少々大げさに言えば、この地を能楽ルネッサンスの拠点にという気風も働いて、参集する人達はまさに多士済々の観もあつた。何れも故人になられた能役者の南条秀雄師と能画家の松野秀世さん、能面作家の後藤祐自さんはこの場所を能面打ち人生の出发点とし今は金沢に腰を据えて根を張られている。確かにその頃の能楽資料館には明日の能楽を語る談論風発の空気が漲つていた。その中から中西氏の発案であさば旅館における演能という話がおこり、それを「申楽/大和座」が取り仕切るといふ数年があつたのである。「能と、桜の花手前」といふ催しがどのような趣向と演出でなされたのか詳細は知らない

が、演じられる能と動かぬ能舞台と安達瞳子という三つの存在が拮抗して心地よい緊張を創り出さねばならない催しであつたはずである。新聞記事に添えられた恐らく晩年のものと思われる写真の端正で強い面構えを見て、《安達瞳子さんは見事に能楽と対峙し拮抗したに違いない》と私は推察した。この追悼文の筆者のような心ある観客はこの日、極めて上等な集中と感応の醍醐味を味わう時間を得た事だろうと思つた。ある意味で能が凄いとされる理由は、演者の資質や情念もさることながら、先ず面装束の力に負うところが多い。あさば旅館の能舞台は江戸のさる大名家にあつた物を移築したと聞く。前面に池を配した舞台は、まさに模造品でも紛い物でもない本物である。六〇〇年以上にわたる風雪の中での試行錯誤を経て究極の完成度を得た面装束もまさしく本物である。この凄く本物に立ち向かう安達瞳子さんの姿に、長い尾羽根を靡かせて寒風に向かつて立つ軍鶏の姿がだぶるのである。私たちは古典伝統芸能について誤つた考えを植え付けられ、それを修正も訂正もされぬまま過ごしてきたようである。岩波セミナーブックス59「能・狂言」（一九九六年、岩波書店刊）に収録された資料の中に「能楽の家元権一覽」といふものが紹介されていて、上演活動に関する権利の項に「面・装束・舞台等の所持

の禁止権」という項目がある。この書籍は「戦後十年の日本の伝統芸能の回顧」と題して、能を横道萬里雄氏、狂言を小林貢氏が担当された講演会の講義録である。この項目の解説を見ると、面・装束・舞台等の所持を禁止する理由は弟子の自立を許さないということらしい。そのための管理制限であつて、これには芸形の正しい保全のためという美名が付く。つまり制限と管理をする側と制限を受けなくてはならぬ者という色分けが厳然と存在しているわけである。歴史的に限られた管理者側の者（一族郎党）は、当然面・装束・舞台等の所持を許されて、それらのものを所有するが故に押しも押されもせぬプロフェシヨナルの認知を受ける。研究者・学者もこの棲み分けに疑問を挟まず、報道もこれに倣つて両者は国が望む古典伝統芸能体制の補完に奉仕する。官はこの体制に様々な権威を与え、大衆は示される棲み分け構図を信じて疑わない。

ば、そのような事は充分起こるはずである。面装束を着けて能舞台上に屹立する演者の姿は、胸の芯に届いて深い感動を与えるはずである。能楽は元々そのような古典演劇なのである。その本質を嗅ぎ取った西欧の演劇人たちが能を渴望しているのである。人間そのものの評価は一切抜きにして、その家者であるかどうかだけを選別の条件にしていると、なるほど質が落ちても仕方あるまいと思われる。面装束の凄さに助けられて後はそれらしい物言い振る舞いに徹していれば諸事安泰、大衆の前に引き出されて化けの皮をはがされる心配もない。実はそのような怖い存在の観客が居ない。こう書いてくると口から出任せの悪態を吐いているように思われるかもしれないが、私は国家が管理しようとする古典伝統芸能体制にほとほと呆れ、欺瞞に腹が立つ余りに批判を試みているのである。近頃古典芸能に関する宣伝文言に誇大で麗々しすぎると思わざるを得ぬ物が目について、私は思わず言葉を失っている。その最たる物は「至高の華」という表現である。まさか演者自身身の言とは思わないが、何の恥じらいもなくかかる言葉を表記して憚らない神経に、私は混沌・軽佻・浮薄の様相はとうとう此処まで来たかと驚くのである。芸術における最高の美辞を未だ壮年にも達していない人気者にかぶせ、観客動員を図ろうという

精神に吐き気さえ憶えるのである。十数年前、家筋の息子たちが集まって会を作るのに会名を「御曹司の会」と発表したことがあつた。さすがにこれは周囲から猛烈な批判とたしなめを受け即座に引つ込められた。この無自覚ゆえの安易さと軽さは、思えば今日の様相への序奏であつたのかも知れない。国全体の仕組みに無理が生じて、いよいよ軋みが大きくなつたように思う。何処を切つても金太郎飴のように同じ演者が顔を出す、これ見よがしの催しには飽きてきた。仰々しい宣伝と裏腹に中身も意味もない劇場公演が馬鹿馬鹿しく思えてきた。と言つような観客が着実に増えてきたと思えぬ事もない。そのような観客が古典芸能の世界を一掃きして、目の覚めるような刷新をもたらしてくれる日の近いことを念じて・・・。

(四月十日)



安東 伸元（あんどつ のぶもと）
一九三五年大阪生まれ。一九六四年能楽協会
入会、狂言方能楽師になる。茂山忠三郎家同門。
一九八一年より教育機関へ出講。現在、羽衣国
際大学名誉教授、大阪芸術大学・大阪府立東住
吉高等学校・NHK大阪文化センターの非常勤
講師。二一年、重要無形文化財（能楽）保
持者総合認定を受け、「日本能楽会」会員。「大
和座狂言事務所」を主宰。

狂言を読む「魚説教」

もろきゆう

関山からの眺望は絶景だった。正面に広大な琵琶湖が広がり、霧雨の彼方に近江富士が映る。琵琶湖畔を眺めていると、昔はこの大津の町が交通の要衝だったことがほんの少し窺える。「そういえば狂言『磁石』の舞台となる大津松本とはこの辺ですね」という若い人の質問に「そう、あの辺りだったかな」と麓の大津の町並みを指さしながら、中世の宿場に跋扈する人買いの姿を想い浮かべた。

三月中旬、大和座企画文学散歩と称して、かつて街道を行き来する人々ににぎわった関山を訪れ、中世に生きた人々について考える機会を得た。眺めのよい近松寺から少し下り、右手の古い階段を登ると関寺跡、長安寺がある。小さいお堂とこざつぱりとした簡素な庭だった。その庭の隅に関寺小町の石碑があり、そこから少し離れたところに一遍聖と超一房の石碑があった。関寺小町の伝説もさることながら、一遍聖・超一房の供養塔がここにあることが面白い。そこで『一遍聖絵』巻七を紐解くと、関寺での踊り念仏の様子が詳細に描かれている。関寺の門前には山盛りの飯をほおぼる少年や、空の鍋をみつめる乞食（こつじき）た

ちがたむろしている。門前の街道は人の往来が激しく、牛車や馬車で荷を引かせている人たちが通る。境内には四角い池があり、その中之島に板を敷き、細い柱を立て、切妻の板屋根を載せた踊り屋が築かれている。踊り屋の中では何十人も僧が輪になって鉦鼓に合わせて走り回り、いずれも眼を閉じ恍惚とした表情をしている。また池の周りは大勢の見物客が囲んでおり、僧俗さまざまな男女が見物をしている。中には大音量に耐えきれず、耳をふさいでいる女性もいる。また池の対岸の廂の下には裏頭巾（かとうずきん）で顔を隠した三井寺の僧や稚児が見物している。『一遍聖絵』の詞書きに「関寺へいり給ふ時、園城寺よりしかるべからざるよし、制止ありとて、其の夜は関のほとりなる草堂に立ちより給ひしほどに、『化導のおもむきゆへなきにあらず』とて衆徒のゆるされありしかば、関寺に七日の行法をはじめ給き。あまさへ、智徳たち対面法談ありて聖の余波をおしまるるによりて今二七日延行せられき」とある。いったん園城寺（三井寺）のお咎めがあったものの、許されて十四日間、踊り念仏を続けたというのだ。一遍聖がこの関寺で踊り念仏を始めたのは、人が集まるからである。人が集まる場所でのこの踊り念仏はじつに効果的だった。速いリズムで鉦鼓を打ち鳴らし、南無阿弥陀仏を唱えながら堂

の中をぐるぐる回っていると、恍惚となり極楽浄土を垣間見ることができたのだ。一遍聖がこの後、都へ上った時には、関寺の評判を聞きつけた人々が押し寄せ、京極釈迦堂前には文字通り貴賤群集（きせんくんじゆ）し大混乱になったとある。つまり、関寺は時宗の踊り念仏の一大ブームを呼び起こすきっかけとなった、大事な場所だったのだ。蛇足ではあるが、超一房の石碑について『一遍聖絵』を見るとその名を見つけることができる。巻二の「伊予櫻井の別れ」の段は一遍聖の弟子の聖戒と別れる場面である。そこには、一遍聖に同行する三人の弟子たちの名前が超一・超二・念仏房と書かれてある。そしてさらに超一房は一遍の妻、超二はその子供だろうという説もある。

その謎とも思える人物の供養塔が何故ここにあるのかは、いまのところ不明である。閑話休題、一遍聖は私たちが抱いている僧というイメージからかけ離れた存在であるように思える。また、平安時代の貴族達が知っている真言密教の僧や天台密教の僧ともかけ離れた破格な存在であった。もちろん一遍聖の前身として法然や親鸞が仏教を庶民にも理解できるものとして布教したことも影響している。しかし、一遍聖は智真と名乗っていたころから破格の修行をしている。たとえば、熊野権現のお告げによ

り「南無阿弥陀仏」の札をくばるとい賦算をしながら諸国を遍歴した。その後伊予国から備後国に入る頃には、一遍聖に引かれて二百八十人余りが出家し、時宗集団となった。さらに時宗集団となった一行に米銭を喜捨したり、宿舎の世話をしたりして結縁した結縁衆が生まれた。そのようにして時宗集団を膨らませつつ回国修行をしていた弘安二年（一二七九）秋頃、一遍聖は踊り念仏をはじめた。この結縁衆には老若男女、貴賤を問わず様々な階層の人々が集まった。それが前述の乞食や乞食僧などの人々や障害者や癩者たちである。乞食僧の中には長髪で高下駄を履き、会下傘を持つた異様な風体の人たちもいる。これは「ぼろぼろ」という集団である。このぼろぼろたちが一遍聖に結縁した乞食僧に交じって、時宗集団とともに布施を受けたりしていることは『遊行上人縁起絵』の中の施行の様子に描かれていることから分かる。

さて、ぼろぼろも含めてこれら乞食僧たちはどのような境遇から出家をすることになったのだろうか。その一つの例が狂言『魚説教』である。「これは津の国兵庫の浦に住む漁師のなれの果てでござる。」という出家は、毎日漁をして殺生ばかりしていることを後世のことをまったく考えない愚かな行為だと思い、思い切つて出家してしまったというのだ。出家後西国をあちこ

ち歩いたが、まだ都を見物していないので名所旧跡を見て回ろうというのだ。俄坊主ゆえお経も知らない。これでは普通の旅人とまったく変わらない。変わる点は僧形のため、普通の旅人とは違って何かと恩恵に預かることがある点だ。かつて一遍聖にはじつにたくさんの非人・乞食（こつじき）僧・癩者たちが付いて歩いたと言われている。これらの人々は施行の余飯にありつくために歩いて歩いたのだ。もちろん『一遍聖絵』には非人たちが門前の小屋に住んでいるように描かれているものも多いが、踊り念仏の場には必ず描かれていることから、一遍聖について歩いたものと推測されているのだ。魚説教の俄坊主もこれらの人々と同様で、出家していれば何らかの形で施行を受けることを予想していたのである。だからもし「お経の文句も知らないのか」と咎められたら棒鱈で叩かれぬうちにさっさと飛魚すればよかったのだ。

了



山田 師久(やまだ もろひさ)

大阪生まれ。本名・山田茂。一九八六年より安東伸元に師事。中世文学及び芸能を専攻研究。大和座狂言事務所の学術ブレーン。月例[△]輪讀会[▽]の座長を務める。学問的指導の他、若いスタッフたちには人生問題の良き相談役として長兄的存在。高等学校国語科教諭。

面白いもん勝ち？

「ステレオタイプで語る大阪」

森五六九(もりごろく)

ステレオタイプという言葉。日本語に訳すと、型にはまった表現、決まり文句、紋切り型という意味。インパクトや面白さだけ追求するという行為は時にステレオタイプを生んでしまう。

毎年修学旅行シーズンともなると全国から中学生たちが大阪にやってくる。私はその彼等を対象にした大阪体験落語講座の講師を受け持っている。彼等は大阪に対してどんな印象を持っているのだろうか。「大阪といえば何？」毎回尋ねてみる。すると返ってくる言葉はまず吉本でありタコ焼きがそれに続く。やくざというのもあった。その筋の人をドラマで描く時なぜか大阪弁が多いのがその理由であろう。AVシネマ「ミナミの帝王」などの影響も大きい。大阪のイメージはと聞くと、面白いと答える生徒が圧倒的に多いが、必ずそれに混じって怖い、ケチ、うるさい、ずうずうしい、派手といった声を聞く。これが本音であろう。ひよっとすると大阪旅行の目的は怖いもの見たさの観光なのかしらん。

大阪体験企画の話を私に持ちかけたのは

企画会社を経営する友人渡邊隆氏。それは大阪にUSJ(ユニバーサルスタジオジャパン)ができた頃のことである。各旅行会社はこぞって大阪への観光客を多く誘致しようとして動き始めた。もちろん修学旅行パックも例外ではない。しかし、大阪にお客を誘致するにUSJは大きな存在であるには違いないのだが、それだけでは何か決め手に欠ける。さて大阪には他に何かあるのだろうか。確かに大阪城といった観光地がある。確かにも知らない。近隣には京都、奈良、神戸といった観光都市。実際、USJで遊びそのまま京都のホテルに行く修学旅行ツアーも多いようだ。でも、大阪城をただ普通にいだらだら眺めUSJで遊びそのまま京都へ行くなんて、それでは大阪を本当に感じたことにはならないだろう。そんな思いから生まれたのが大阪体験落語講座であり、ちんどん屋講座であった。「蝶六さん、修学旅行で案内するならどこへ連れていく？」と渡邊氏。「大阪城・USJ」。吉本、やないしな。僕は落語聞いてほしいけど。ホンマ大阪でこれといった観光地に欠けますわな」「大阪名物で何やと思っ？」。「・・・そら、人とちゃうやるか。大阪人そのものとかやいまつか」今思えば、渡邊氏の相談は誘導尋問だったのかも知れない。私は続けた。「今は昔と違って、大阪弁が全国に浸透してますわな。けど、それはド

ギツイ大阪弁ばかりで私なんかそんなちやうと思いませんね。芸人の中には汚い大阪弁使ってるのいてますわ。お客さんに対してもそうです。お客さんをお客さんと思ってる。私ら落語家は師匠にやかましく言われたもんやけどな。それに大阪はドギツイとかケチとかズルイとか、そら言われても仕方がない部分もあるかもしれまへんけど、マスコミかて『大阪と言えば』みたいな感じでそれこそステレオタイプでしか大阪を紹介しまへん。そうやない大阪、大阪人をきちんと紹介していくべきぢやないまつか。私の愚痴ともとれない戯言を渡邊氏はいつも黙って聞いてくれる。彼もまた大阪のいいところをステレオタイプでなくきちんと紹介していきたくないと願っていた。バブル時代、リゾート観光の敏腕企画マンであった彼は金儲け主義だけの観光のあり方につつと疑問を抱き続け、ある日あつさりそこを退社、アウトドアレジャーの会社を立ち上げた。子供たちに自然との戯れ方を教えるプロである。強い信念と展望をもっている。

ところで話は変わって大阪梅田にあるECC落語教室。私はここでも講師の一人として名を列ねさせてもらっている。受講生はOLやサラリーマンに混じって劇団の女優さんやら司会業にお坊さんと多岐に渡る。その一人におばちゃんタレントで古林八重

子さん。「みかん山プロダクション」の所属だ。この事務所は御存知の方も多いと思うが、静岡県の「オレオレ詐欺撲滅キャンペーン」「コマーシャルなどで一躍有名になった。たくましい大阪のおばちゃんを前面に押し出した作品。一方でずうずうしい、厚かましい、羞恥心に欠けるといふ声も聞く。確かにインパクトはあるし面白さもある。

けれど、私に言わせるとそれこそ大阪の悪いステレオタイプを助長させる一因になっている気がしてならないのだ。彼女はそこに出演しているわけではないが、聞けば少なからず私に同感の部分もあるらしい。けれど事務所への依頼はそういう一面を要求される事が多いと聞く。大阪研究家の前垣和義氏は著書「どや！大阪のおばちゃん学」（草子社）の中で番組におけるおばちゃん（草子社）の値切りシーンについてこう述べている。

「大阪人は『サービスピ精神の固まりであるから、テレビのディレクターや視聴者が『何を求め、何を期待しているのか』を心得ている。それに応えるために、えげつないと思われるほどの値切りを行い、オーバーアクションで頑張るところがある。店側も『これも、ええ宣伝や』と許すから、テレビ番組では誇張された場面がどんどん創出され、それが先入観をつくり、イメージを広げることになる」大阪人は一般人なれど芸人気質なところがある。けれども、これ

が大阪ローカルなら事情は多少なりとも理解しているからまだいい。全国ネットとなるとちと辛いものがある。誤解を生むことだってある。ちなみに古林さん本人はいたって気イ遣いで親切で愛嬌のある方。もちろんサービスピ精神も旺盛だがどちらかと言うと普段は奥ゆかしい。マイナスイメージだけで大阪のおばちゃんを紹介するなかれ。落語を懸命に学ぶ彼女に私はおおいに期待している。

さて件の大阪体験であるが、何とか良き大阪を「落語」を通じて伝えられないものかと私は考えた。マスコミでステレオタイプの紹介されるドギツイ大阪ではなく、商人さんによく見られる常にお客を優位に立てる気イ遣いの大阪、俗にいう「下駄を預ける」物言い。コミュニケーション能力に長けた大阪。はんなりした大阪。そんな部分を伝えたいと思った。汚い大阪弁や質の悪い笑いは絶対に禁じ手というのが我ら大阪体験落語講座の鉄則。現在何とかリピーターに恵まれてまずまずの経過。

一方のちんどん屋体験。彼等を薦したのは、修学旅行生たちが「ちんどん屋」になって商店街を練り歩けば、必ずおばちゃん達が寄ってくるに違いないと思っただからだ。そうなれば人なつこくて親切で世話好きなお客の一面が体感できる。幸い「ちんどん屋」のルーツは大阪にある。江戸末期、

千日前で飴勝さんという飴売りが口上を言
いながら売り歩くとその飴が飛ぶように売
れたという。そこで他の商人たちが飴勝さ
んに口上の代行をお願いするようになった。
これが宣伝代行業、つまりちんどの始ま
り。(林幸治郎著『チンドン屋! 幸治郎』
新宿書房に詳しい) 林幸治郎氏率いるちん
どん通信社の奮闘や谷町六丁目の空掘商店
街の協力もあつて、思惑通り毎年多くの修
学旅行生に良い大阪人を体感してもらつて
いる。

「面白かつたらええやん」「目立つたも
ん勝ちや」という面白さやインパクトも大
事だが、それだけに固執するととんでもな
い方向に行くことが多々ある。大切なもの
大事なものがステレオタイプの陰に埋もれ
てしまうことだってある。意識しないと悪
い方向に進んでしまうのが人間なのかも知
れません。(了)二 六年三月二十八日



森五六九(もり「ごらく」)
大阪生まれ。落語名・桂蝶六。大蔵流狂言
方安東伸元に師事。現在、放送芸術学院、大
阪スクールオブミュージック専門学校、大阪
シナリオ学校の各非常勤講師の他、ECCア
チストカレッジの落語教室及び大阪府立桃谷
高校特別非常勤講師など、「高座」ならぬ
「講座」も勤める。現代社会にあつて、好ま
しい芸能人の在り方を模索中。

目利きへの道

井上放雲

舞台芸術や古典芸能、クラシック音楽等
の批評には、常々不思議な違和感がつきま
とつ。同じ舞台を観ても、ある人は良かつ
たと言い、ある人は退屈だったと言う。自
分は退屈だった気がするけれども、周りの
人たちが皆良かったと口々に言うので、
「そういうものなのかな？」と納得させら
れてしまう事もある。

以前この通信で「古典の価値は一定か」
と題してこのテーマに触れた際、古典は自
分の立ち位置によつて全く異なる価値を提
供する、と結論づけた。また同じ作品に何
度も接する際、常々新しい発見を与えてく
れる力を持ったモノこそが古典である、と
も述べた。今回はもう少し突っ込んで、多
様な価値を与えてくれる古典と、それを受
け取る側の人間が実際にどの様に関わって
いるかを分析し、古典を享受する際のある
べき姿を考察してみたい。

客席に座つて舞台を観ている時、人はそ
れぞれいろいろな事の善し悪しをまず無意
識下でとらえ、その働きかけの大小によつ
て意識の表層で言語に変換していく。美し

い・かつこいい・上手い・気持ちいい、汚い・下手・気色悪い、等々。この無意識下における、言葉以前の感覚を「直感」とか「感性」と言つて良いと思つが、この感覚は、実は次の3つのベクトルが作用して生まれてくる。

一つは、作品自体の善し悪し。つまり構成やテーマの面白さや、詞章・楽曲の美しさなど、作品自体の持つレベルである。かつてワルシャワ室内歌劇場がモーツァルトのオペラ作品全作を上演した際、私は半ば意地になつてそのほとんどを鑑賞した事がある。たかだか数十名の歌手しか擁していない小さな歌劇場が、日替わりで二十作以上に及ぶオペラ作品を上演したことに私は度肝を抜かれたものだが、ほぼ全作品を俯瞰して眺めた事によつて改めて実感させられた事があった。それは、有名な『フィガロの結婚』『魔笛』『コシ・ファン・トゥツテ』『ドン・ジョバンニ』などは、やはり特別な大傑作であるという極めて当たり前の事実を再認識されられたのである。もちろん12歳の時に書かれた『バスティアンとバスティアンヌ』の様な作品の中にも、モーツァルトらしい可愛らしい輝きを感じ取る事は充分可能であるけれども、後期の傑作たちとは比べようがないほどの歴然たる差を感じた。何がどう、というのは言葉では説明しにくい。何しろ面白さのレベル

が違ったのである。作品自体のレベルの上下は、観る側に与える面白さの度合いを、明らかに左右する。

二つ目は、上演レベルの善し悪し。言わずとも知れた、演者の技量の問題だ。同じ作品が、演者によつて全く違つて見える事などザラにある。狂言に関して言えば、上演レベルが低くても作品自体が面白く出来ているため、何となく良く感じてしまうことも多いが、本当に上手い演じ方と下手な演じ方、正しい演じ方とデタラメな演じ方は明らかに存在する。

そして三つ目が以前にも論じた、観る側の今いるレベルによる差である。作品や作者に対する興味関心、演者に対する好き嫌い、作品の持つ歴史的背景への造詣の深浅、自身の健康状態や精神状態によつても違いは生じる。良い作品を良い演者が上演し、質の高い舞台を創り上げても、感知出来ない時もある。また質の低い作品と演者に感動してしまう事もある。

この三つのベクトルが無意識下において示す合計ポイントこそが、自分の直感・感性に他ならない。最初に述べた違和感とは、この3つの視点がかつちやになつていたり、先入観や思いこみによつて、そのどれかを絶対的なモノとしてとらえたりした上で生じているのではなからうか。

そこで私が提案したいのは、何かに感動

したり退屈したりしている自分に出会ったとき、その理由を、例えば先の3つ項目の視点から分析してみてはいかがだろう、という事である。対象を見つめると同時に、その対象の何が自分の意識下に作用を与えているのか、自身の内側に向かつて問いたすのだ。すると自分の指向性が見えてくる。

私は、とりあえず一つ目のベクトル・作品の価値と、二つ目のベクトル・演者の価値を正しく見極める力をつけたいと思つている。いわゆる「目利き」でありたい。そのよりどころを、先入観や思いこみにとらわれず、自身の直感・感性を起点としたい。良いと感じたモノを何故良いと感じたか分析し、分析した結果本当に良いモノであったならば、自分の立ち位置は一步前進だ。自分の立ち位置が上昇すれば、直感はずれにくくなる。良いモノを良いと感じ、悪いモノを悪いと感じたら、自身にフィードバックさせ、また周りにも表明する。すると、必然的に悪いモノは淘汰され、良いモノが残つていくはずだ。これが本来古典芸能の世界において作用していた「目利きの力」であり、「目利きの正しいあり方」だろう。

了



井上放雲(いのうえ ほううん)

兵庫県生まれ。本名・井上康夫。相愛大学音楽学部卒業、ヨーロッパ留学、国立ワルシャワ・シヨパン音楽院修了。チェリストでもある。日本の舞台芸術理論を学ぶべく、安東伸元に師事。バルト三国・イラン公演に参加。室内楽グループ「アンサンブル「ベンジェ・ドブジェ」」の代表を務め、東西古典文化の間を日々驚嘆の喚声を発しながら往復している。小田・金久君をはじめ学生達にとつては最適の相談役。相愛大学オーケストラ講師と大阪芸術大学演奏学科オーケストラ演奏要員を勤める。

兆紀探求 「意志の継承」

小田兆紀

以前お知らせしましたが、去る四月十六日「橋本市子供狂言会」の本番を無事迎える事が出来ました。ここで、この子供会について簡単ですがもう一度説明をしたいと思えます。

昨年八月、和歌山県橋本市で子供を対象にした子供狂言教室が発足し、大和座が主管・指導として関わる事になりました。文化庁への申請が通り、市の教育委員会の後援も得られて行われる事になった狂言教室です。私と金久が講師として月二回、三月までの合計十五回子供達を相手に長い戦いを繰り広げたわけです。今回お伝えするのはその成果についての報告ですが、少々熱くなりすぎて感想文の様になってしまったところはどうぞご容赦下さい。

少々乱暴に申し上げるならば、子供にしてみれば興味の対象という点で言えば、狂言だろうとゲームだろうと野球だろうと全く同じでしょう。要はその子供達が面白いと感じるか否か。もちろん自国の古典芸術とゲームを比べるのは不適当な話ですけどね。現に子供たちは自分の興味を惹いてくれる

ものに対しては実に率直に向き合います。それを我々大人がどんなにくだらないと思おうと子供たちはおかまいなしです。しかし大事なものは、それらと古典の違いは今後生きていく上で得なければならぬ知恵や道徳観、果ては他者を思いやれる想像力を得る事が出来ると言う事でしょう。今現在日本全体に蔓延っている社会現象、つまり知的好奇心や想像力を喚起しない、ただ劣情や己の欲望を満たすだけのものには興味を示さなくなる子供を量産し続けるのは問題です。そんなものしか与えないのは我々大人の問題だと思えます。強制する必要はないとしても、選択肢をたくさん用意してあげるのは我々の責任であり、また義務ではないでしょうか。

我々大和座の武器は古典、ことに狂言です。折角社会に到達できる武器があるのにこれを駆使しないのは愚かです。私たちがこの様な事に関わる理由はただ一つ、自国の文化・古典を本来のあるべき姿で後の世に伝達する事、これに尽きると思っています。

さて、結果から申し上げますと本番は大成功。観客動員は一二〇人を越す盛況ぶりです。お客が入ってくれるかという我々の心配は無用なものでした。教育委員会も納得の上々の出来。しかし、また乱暴な言い方になります。子供がたった15回の稽古で狂言の舞台にあがる事が出来、どうであれ発

表するといふ結果を得る事が出来れば、それは物珍しさなども含め喜ばれるのは当たり前なのです。そんな事より大事なことは、将来の日本を担う子供達に前述した古典を通じて得る事の出来る社会常識や道徳観、他者を思うことの出来る想像力の喚起、何より「正しい日本語」の伝達などが体験認識させられたという事以外に無いと断言できません。社会通念である「難しい古典を、少ない稽古数で子供に狂言が出来るはずが無い」という固定観念をぶち壊し、当日観

に来られた方々の目から鱗を一つ落とさせただけでも今回の公演は成功したと言っても過言ではないはず。子供の頑張りや間違いなく本物だったと思います。ゼロから子供会を発足させ本番に至るまでの様々な諸事難事を支えて下さり、また本番の舞台を用意して下さった橋本市民狂言を楽しむ会の皆さん、そして何より私達二人を指導して下さいました師・安東先生、そして大和座狂言事務所、どれが一つ欠けても今回の成功は無かったと言いつける事が出来るでしょう。子供がただの一人も欠ける事無く最後まで付いて来てくれた事や、本番を真摯に終えてくれた事には喜びを感じています。同会の或る方は本番の舞台を客席後ろで見ながら終始涙を流しておられたそうです。それだけ思い入れがあったからでしょう。私も少なからず自分に子供が居たならばこ

の様な感情になったのではないかと思わずにはいられない位こみ上げてくるものがありました。終わった子供たち一人一人の頭を撫で、小脇に抱きかかえ「よくやった」と誉めたその感情には一切の打算はありませんでした。それだけに、子供達の頑張り無しにしないためにも今後見据えなければならぬ課題は、この後どの様な形で継続していくか、そしてどの様なメッセージを地域社会に通達していけるかという事だと思つのです。

少し本番の事もお知らせしておきましょう。絶対的稽古不足の子や声の問題、各人の自信等、演目とそれをやる個人で問題は山積みでしたがその中で子供達は自分自身を御し今まで得てきた事を最大限発揮してくれたと思います。それがたとえ満足のない結果だったとしても、それ以上に大切な事を子供たちは得てくれたのではないかと思います。本番十五分前になつても未だにわいわいと騒いでいて、これから本番だという気持ちになつてくれない子供達全員に私は最後の檄を飛ばしました。「今君達がここでこけるのは勝手だし構わんが、そうすると君達が今まで稽古に費やしてきた時間全てが無駄になる。金久先生が君達にずっと言ってきた『チャンスは一度きり』というチャンスはまさに今日この瞬間。これから大人になるにつれこのチャンスとい

うものを見極めなければならぬ事態はどんどん増える。少なくとも今その瞬間が来ている。やる以上は真剣に真面目にやりなさい。今の態度を見てみると、お世辞にも真面目にやっている様には見えないう。あと十五分黙って精神集中する事が今までしてきたことに比べるとそれ程苦痛とは思われない。俺や金久先生を舐めるのは一向に構わんが狂言を舐めるのは絶対に許さん。君達もきつと今やらなかつたら後悔する、だからその後悔をしない為に今この瞬間、集中しなさい。以上だ。」今思えばこんな恐ろしい事をよく言つたものとは思いますが、この檄に対して子供達は見事に応えてくれました。それまでざわついていた子供達が銘々台本を読んだり動きの確認をし始めたのです。金久と二人で「ようやくやる気になった」と苦笑。その後の成果は、先ほどからお伝えしている通りです。

この叱るという行為ですが、子供は要所で厳しく諫めないとそのものを舐め続けるという本能を持っています。以前に申しましたが、私をはじめ子供に狂言を教える機会に巡り合った時に「一緒に下さった先生に「子供は叱る時は叱らないと、ズルズルと舐めてくる。それが小田さんだけに留まるのなら良いが、そうではなくて大人ってこんなもんなんだ、大人全員をひいては社会全体を舐める事に繋がるからそ

れだけは絶対避けなければならぬ。だから、怒る時は真剣に叱ってあげなさい。」と教えて下さった事が私の中にずっとありました。子供達にも言いましたが、私を舐めるのは構わないが狂言を、社会を舐められるのは実に不本意です。社会を舐める子供の量産の一助だけはしてはならないとこの半年、金久と二人で歯を食いしばって来た所です。手前味噌になります。そこだけは守れたのではないかと自負しております。

終わってみて、子供に教えるという事は本当に大変な事でした。ですが、それ以上に得たものは大きかった。ただ一人の脱落者も出さずにこうして本番を迎えることが出来、成果も上々。だが、ここで勘違いしてはならないのはこれらは全て古典の持つ力だという事です。自国の古典のあるべき姿で伝えたい、それが結果地域社会の人間の育成に繋がるのが望むところではないでしょうか。加えて今後の課題は何度も申しています通りこの会をどのような形で発展させていくか。二回目三回目と情性で続ける事に何の意味もありません。一回目の産みの苦しみを忘れずに、それでいて与えるものを今回よりもたくさんにしたい。今年度からは富田林市でも同様の主旨をもった講座が始まり、橋本市では2回目の継続が既に決まっています。今後に向けて更に伝

えたい事の整理が急務になりそうです。



小田 兆紀(おだ ちようき)

一九七八年和歌山県新宮市生まれ。
本名・小田政明。大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。大学の講義で安東の薫陶を受け、卒業後「大和座狂言事務所」に所属し研修を重ねている。二、三年のイラン海外公演に参加、この経験は演劇を目指す人間として自覚を定める開眼脱皮の貴重な経験となった。二三年以来、橋本市の「市民狂言を楽しむ会」講師をつとめている。

「チャンスは一度きり」

金久蒼汲

(財)伝統文化活性化国民協会事業の一環として、橋本狂言を楽しむ会が主催、橋本市教育委員会の後援を得て昨年の夏から開講された「子ども狂言教室」が、このたび無事発表会を迎えましたので報告致します。

半年間に亘って開講されたこの教室は、自国の古典伝統文化である狂言を実際に子供達に体験してもらうことを目的として企画されました。現在の教育現場において、例えば音楽を教えるのであれば実際に楽器を持たせ演奏させるでしょう。美術を教えるのであれば絵を描かせるでしょう。ですが、いざ古典を教えるとなると、専ら「鑑賞」させることにのみ終始しています。子供達の社会的道徳観や生活を豊かにする情感を育むために最も大切な事は、その国その民族が歴史的に積み上げてきた古典伝統的なものを日常的に体感できる生活環境を用意することではないでしょうか。そのためには鑑賞から一歩踏み出して、実際に体験して古典の真意を吸収する機会を作る事が何より重要と考えます。

昨年八月の猛暑の中、地域の小中学生十五名が顔を揃えました。狂言を一度も観たことがないという彼らの表情は、これから

始まる未知の世界への不安と期待に戸惑っているようにした。ですが実際に私達が彼らの前で狂言と小舞を演じてみせると反応は一転。感受性豊かな彼らはすっかり狂言の魅力に取り付かれたようで、教室が終わってから「あの役がやりたい」「あの小舞が舞いたい」と申し出てきました。中には「全部やりたい」という積極的な子まで出るほど。最初の数回はとにかく狂言台詞の反復で日本語の力強さや言葉に対する意識を促し、また狂言歌謡「雪山」を毎回謡うことで日本語の音楽性や情感を感じ取ってもらうことに努めました。次に狂言の基本的な立ち姿勢と所作の習得です。座る、立つ、歩くといった一つ一つの動作を丁寧に的確に覚えさせていきます。普段彼らが何気なく行っている行動とは違い、台詞も謡も動きも、そのひとつひとつに重要な意味を持つ狂言独特の手法に、さすがの子供達も四苦八苦している様子でしたが、回を重ねる毎に少しずつですが彼らの身体に馴染んでいく様子が見てとれました。いよいよ配役も決まり、それぞれの演目に分かれると、「私はこの役をやるんだ」「この小舞を舞うんだ」という責任感が芽生え集中して稽古に臨むようになり、それぞれの良いところも悪いところも段々見えてきます。特に台詞をなかなか覚えられない子や、恥かしくて大きな声を出せない子など、それ

ぞれの苦手な部分が目立つようになります。そうなるも彼らの意識は違ふところに行つてしまい、落ち着きが無くなったり、お喋りを始めたりしてしまいます。子供なのだからすぐに飽きるのは仕方ないのですが、物事には規律や礼儀が大事であるということを学ばせるためには、時には声を張り上げて叱ることも必要でした。それからはいかに彼らの苦手意識を克服し集中力を持続させるかが我々の課題となりました。ひとりひとりの苦手な部分を、少しずつ課題を与えながら克服させていきます。それはまるで子供の皮膚に自分を滑り込ませ、少しずつずらして彼らを脱皮させていくような感覚でした。稽古中に私は子供達に「チャンスは一度きり」と言い続けました。彼らにはこれから生きていく上でチャンスが沢山出てきます。ですがそのチャンスを活かすも殺すも、彼らの一瞬の集中力と判断力と瞬発力次第です。その一瞬を決して逃さないための稽古を、狂言という古典を通して訓練しているのだということを彼らに伝えたかったからです。また彼らには「沈黙の力」を信じさせる必要がありました。日頃雑然とした現代の生活しか知らない彼らは、独りになって沈黙考する術を知らず、静寂を恐れているようにすら感じたからです。沈黙することで意識を研ぎ澄ませ、物事の本質を見極める観察眼を養いたかった

のです。そうして日ごとに上達する彼らは、充実感に満ちた自然な表情を見せてくれるようになりました。

四月九日発表会当日。朝会場入りしてくる子供達の表情は実に様々でした。期待に胸を躍らせる子、不安で落ち着かない子、気合を入れて丸刈りにしてきた子など、見ている我々まで緊張してしまいます。場当たりを終え、それぞれ着物と袴に身を包むと、彼らの緊張はいよいよ頂点に達しました。もう居ても立ってもいられず、着物はただけんばかりの大はしゃぎです。気持ち痛いほど分かりますが、最後のお叱りを受けいざ本番です。狂言「しびり」「いろは」「附子」小舞「桑の弓」「十七八」「土車」「雪山」「盃」「幼けしたる者」どの演目も稽古の段階とは比べ物にならないほど素晴らしいものを魅せてくれました。お世辞にも完璧な上演とは言えませんが、それでも彼らは舞台上で見事に自分を出し切り、百二十名を超える観客の心を捕らえていました。

終演後の子供達の表情は、全てをやり切った充実感と自信に満ち溢れた、何とも言えない輝きを放っていました。それを迎える親御さん達も立派に舞台を勤めたわが子を見て安堵された様子でした。周りの大人達も、実際にここまで見事に子供達が狂言を演じるとは想像していなかったようで、素

直に古典を吸収する彼らに驚くとともに、改めて古典を人格形成の柱とすることの重さを理解してもらえたように思います。狂言なんて難しく子供には無理だろうと考えるのは大人の方で、実は子供の方が純粹的に確に順応できるということを感じさせてくれました。開講当初は伏し目がちで背中も寝ていた彼らですが、今は堂々と背筋を伸ばし、臆することなく真直ぐ前を見つめられるようになりました。狂言という古典は彼らに一体何を与えたのか。日本語の美しさ、沈黙の力、人前に立つ勇氣、目的を持って取り組む姿勢などは勿論ですが、彼らの一番の収穫は、自分の可能性を信じて良いと思う強さではないかと私は感じています。たった半年という短い期間ではありませんでしたが、自国の古典の真意を吸収するというチャンスで、彼らは見事に活かしきったのです。



金久齋汲（かねひさ そつきゅう）

一九七八年広島県呉市生まれ。

本名・金久寛章。大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。小田とは同期。同じく安東に師事して稽古に通い卒業後「大和座狂言事務所」に所属して研修を積んでいる。演劇人としての肉体訓練の重要さを自覚して日々精進を怠らない律儀さを持っている。二 三年、イラン公演で処女海外旅行を果たす。二 四年インドネシア公演旅行に参加。

大和座狂言事務所関連

催しのお知らせ

五月

四日【木・祝】 午前十時 岡山市後楽園能舞台

「藤々会」春之大会（入場無料）

袴能「百萬」ほか

十日【水】 午後六時 帝国ホテル（非公開）

「ダイナミックオーナーズ会」講演会

十六日【火】 午後六時 千里山教室

輪読会「在原業平について」

（参加費）五 円

「お問合わせ」大和座狂言事務所

二十日【土】 午後二時 堺能楽会館

「市民講座」狂言Ⅰ

狂言の女 Ⅰ「二九十八」・「鈍太郎」

（入場料）二 円

二十一日【日】 南海グレル東店（非公開）

「堺市鍼灸師会六十周年記念催し」

狂言「神鳴」

三十一日【水】 関西大学「凜風館」

留学生対象文学部集中講義「日本事情」

六月

三日【土】午後七時 広島市「加茂川荘」内能舞台

狂言を観る会「千鳥」・講話

「お問合わせ」 八四六一二九一 二二一

六日【火】午後二時 大槻能楽堂

「市岡高等学校能楽鑑賞会」

能「殺生石」 狂言「佛師」

七日【水】午後一時 堺能楽会館

「大浜中学狂言鑑賞会」

「附子」・「演習」

十四日【水】 明石市

神戸新聞文化講演会

十九日【月】 大槻能楽堂

「関西大学第一高等学校狂言鑑賞会」

狂言・講話・演習

二十一日【水】午後二時

「古典伝統芸能と出会つひととき」その四十一
新シリーズ《室町の民衆像》

『都大路を闊歩する無法者』

『金藤左衛門』『悪坊』講話と歌唱ほか

会場 千里中央『A&Hホール』

(入場料)会員/二二〇〇円

一般/一五〇〇円

「お問合わせ」A&Hホール

〇六 六八七三 二六〇七一

編集後記

新生旅立ちの季節になりました。小田、金久両人の今期最初の仕事は、初めて二人だけで講師を務めた「橋本子ども狂言教室」の発表会でした。人を教える事が一番勉強になるといいます。彼らも子どもたちを教えたことで、思いを伝えることの大変さと、大きな仕事をやり終えた充実感をしっかりと味わったようです。二人の文章からこの経験によって彼ら二人が大きく前進した事が伝わります。

大和座は常に『現役』であり続けたいと願い、そのために努力しています。現役で在り続けるということは、自分が今いる場所に安住せず、更なる発展のために常に変化を求め向上し続ける事です。

今年新しい試みとしてA&Hホールの夕方の公演を展開します。また小田君、金久君は橋本市だけではなく、富田林市においても子ども狂言教室を受け持ちます。この二人に続くのが寺西君、中西君ですが、この二人は今年から本格的に舞台上に立つとともに大和座のホームページにも大和座メンバーとして公式に登場するとあって、かなり気合いが入っています。これら若手の奮

闘振りに暖かい声援を送って下さる方々のお陰で、大和座の若手はどんどん成長しています。これからも大和座の『現役』ぶりをどうぞご支援下さい。

秀

発行日 二〇〇六年 四月二十一日
編者 許 秀美
発行者 安東伸元

大和座狂言事務所

代表 安東伸元

千五六五〇八四一

吹田市千里山東二丁目3の3

TEL 06(6384)5016

FAX 06(6384)0870

<http://homepage3.nifty.com/yamatoza>

e-mail: BYX04535@nifty.ne.jp

